

Title	第10号発刊にあたって
Author(s)	片山, 剛
Citation	近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター. 2021, 10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84923
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

第 10 号発刊にあたって

2年ぶりのニュースレターになりますが、おかげさまで第10号をお届けすることができました。今年こそは余裕をもって第10号の執筆・編集を迎えられるものと思っていましたが、想定通りに運ぶことがかなわず、年度末ギリギリの入稿になりました。そして所載の拙文は、推敲する暇のないままのものとなり、誤りが多いものとなりそうです。

今回は3本の研究ノートを掲載しています。1本目は小林茂氏、山本一氏、そして片山の合作ですが、多くは小林氏の執筆です。これまでに収集してきた、主に1920年代の南京を対象とする地図・空中写真について、なぜ1920年代にそれらの地図が作製され、空中写真が撮影されることになったのかという、地図作製や空中写真撮影の時代背景、また英米日の列強の意図を掘り起こそうとしていこうとするものです。2本目は山本一氏単独のもので、日本占領期の南京における「敵産」のうち、とくに住宅を対象にして考察したものです。このテーマについては先行研究がほとんどなく、関係する制度や用語と懸命に格闘した跡がうかがえるものです。この2本は、昨年の夏休みにはすでに完成していました。3本目は片山単独のもので、前回、日中戦争期の南京をとりあげた縁で、日本の参謀本部はいつから「南京攻略」を構想していたのかという問いに答えようとしたものです。答えは簡単にすぐ出るだろうと思って始めたものの、参謀本部が作成する「兵要地誌」の世界の深みにはまりこみ、抜け出せなくなって、長大なものとなってしまいました。

さてコロナ禍が一年以上続いています。ちょうど一年前、いつものように3月にチームで台北の国史館へ通い、1934～46・47年の南京登記文書を閲覧する計画でしたが、やむなく中止。昨年の夏も、今年の3月も、計画すら立てることができないまま。そのため、科研費も来年度へ繰り越すことになり、その意味では科研費で進めていきたい研究についてじっくり考える時間をいただいた、と考えているところです。

繰り越した予算で、来年度は国史館へ行き、収集した資料を解析した成果をワークショップで報告し、それをニュースレターに掲載する、というフルコースを歩めればと期待しますが、やはりなかなかむずかしい状況です。

2021年3月16日

代表者 片山 剛